



絶対零度の魔法使い

ぜったいれいどのまほうつかい

author

→アルト←

illustration

∴

主な登場人物 Characters

クラウス

アウレールの幼馴染。弓の使い手。短気で感情的だが、意外と頭脳派。

アウレール

ナハトの護衛をしているエルフの女性。水魔法が得意。

ナハト

本作の主人公で元・落ちこぼれ貴族。死にかけてるところを助けられ、目が覚めると最強の水魔法使いに覚醒していた。覚醒後は何故か髪の毛の色が抜け、白髪に。

マクダレーネ

ナハトの魔法の師匠。エルフの村一番の実力者。脳筋。

ツァイス

領主の娘。魔物を自らの手で狩りに行くおてんば娘。Bランクの冒険者でもある。

ウォルフ

狼の魔物。餌付けをしたら懐かれてしまい、一緒に旅をする事に。



第一章 壊れ者とナハト・ツエネグイア

第一話

燦々と降り注ぐ太陽の光が差し込んでいるにもかかわらず、そこは陰鬱な空気がこれでもかとい
うほど漂っていた。

例えるならば、負の感情を纏めてごちゃ混ぜたような、そんな空気。

しかし、堅牢な鉄格子が無数に並ぶこの石造りの牢獄を見れば、そんな重苦しい空気も仕方がな
いと思えてしまう。

牢の向こう側には、手枷足枷をはめられ、自由を奪われた者たち——所謂、奴隷がいた。

ある者は、生気の感じられない濁った瞳でこちらを見つめ。

ある者は、侮蔑の感情を湛えた視線でこれでもかと睨め付け。

そしてある者は、非道な主人に買われるよりマシだと考えているのか、十五歳という、まだ子供
に近い年齢の俺に割合友好的な感情を向けてくる。

ここは、奴隷館と呼ばれる場所であった。

「本日は、どのようなご用件でしょうか？」

商品として扱われている者たちを物色する俺に、声が投げ掛けられる。

どこことなく粘着質な印象を与えるその声の主を、俺は知っていた。

振り返りながら愛想笑いを浮かべて、ここに赴いた目的を口にする。

「『壊れ者』が欲しいんだ」

そう言うのと、俺の視界に映る肥太った男、奴隷商のオーナーは得心したように笑みを深めた。

彼とは何度もこうした取引を行っていたから、『壊れ者』という言葉に不審を抱く様子もない。

ただ、『壊れ者』と聞いた瞬間、堅牢な鉄格子越しに、囚われていた何名かの奴隷から、殺意と憤怒のこもった視線が俺に向けられた。これが牢越しでなければ、俺はこのうちの誰かに殺されていただろう。

そんな予感を即座に抱く程度には、濃密な殺気が俺に向けられていた。

『壊れ者』とは隠語で、要するにそれは、値段があまり高く付かない欠陥品の奴隷、という意味の言葉であった。

その言葉を聞いた奴隷たちは怒り狂い、次第に怨嗟のようなうめき声すらもらし始める。

「ふむ。『壊れ者』、ですか……確か、使い古しの奴隷が二人、昨日うちに売られてきましたね。年若い獣人の兄妹なんですけど、どうにも主人に噛み付いたようでした、俗に言う、『狂犬』と呼ばれる類いの者たちですね。それでもよいのでしたら」

そう言つて、オーナーは確認してくる。

「構わないよ」

「分かりました」

オーナーは胸元のポケットから鍵を一つ、取り出した。

そしてすぐ近くの牢へとその鍵を差し込もうとする。

どうも、その『狂犬』とやらをオーナーは今すぐ俺に押し付ける気満々らしい。けれど、俺はその行動に待ったをかけた。

「ああ、ちよつと待つて。二人となると、色々と用意する事が多くてね。後日出直そうと思うんだけどそれでもいいかな」

「ええ。そういう事でしたら一向に構いません。ちなみに、いつ頃になりますでしょうか？」

「そう、だなあ……」

悩む素振りをほんの少し見せて、俺は隣に視線を移した。

直立不動で控えていた、俺の護衛である一人の男。

「三日もあれば万事抜きなく準備を整える事が可能です」

「オーケー。なら、三日後、また訪ねさせてもらうよ」

護衛の男がそう言ったのを聞き、俺はオーナーに伝える。

「オーナーはぺこりと一礼し、「お待ちしております」と言つて、鍵をしまった。

「それじゃ、用も済んだし帰るよ。行こうアウレール」

自分の意思で奴隷を売買する奴隷館に来ている俺が言えた事ではないが、実を言うとこの場所が好きではない。

……いや、それでいい。きっとこの空気に慣れてはいけなのだろう。人として、道を外れたくないのならば、慣れるべきではない。

自分にそう言い聞かせながら、俺の護衛をしてきている耳の長い男——『エルフ』と呼ばれる種族の男の名を呼び、出口へと向かう。

その間も絶え間なく、研ぎ澄まされた殺気が俺を射抜き続けていた。

間違いないそれは、『壊れ者』を買った事に対する殺意。

安くなった奴隷を好んで買う事は、彼らを同じ人間として見ていないように、ただの商品として見ているように、感じられるのだろう。ふざけるなどという感情が湧くのも理解できる。

俺は、安いからという理由で『壊れ者』を買っているわけではないのだが、それを彼らに説明する気はない。

何故ならば、それはただの俺の自己満足で、彼らの恨みや憎しみを解消する事には繋がらないから。そう知っていたからこそ、俺もアウレールも振り返る事なく、奴隷館をあとにしたのだった。



暇さえあれば奴隷館に通い、奴隷を物色する。

それが俺、ナハト・ツエネグイアの日常であった。

この世界では、普通、貴族の血を引く者は生まれながらにして何かしらの魔法が使えるのだが、

何故だか魔法の才に恵まれなかった俺は、己を守る手段を求めた。

そして、辿り着いた答えが奴隷であった。俺は、彼らに可能な限りの自由を与える。

その代わり、俺を守ってくれと、そんな、情けない契約を結んでいるのだ。

護衛の数は多ければ多いほど安心だから、定期的に奴隷館に通っては、仲間になっってくれそうなのを探している。

「なあ、ナハト」

奴隷館をあとにすると、先程とは打って変わって砕けた態度でアウレールが俺の名を呼んだ。

「ん？」

「いつまで続けるつもりだ」

「なんの事？」

俺は、発言の意図が分からず困惑した表情を浮かべた。

「……奴隷の、事だ」

言いづらそうに、アウレールが口を動かす。

「そうだなあ……取りあえずは成人するまで、かな」

魔法が一切扱えない『落ちこぼれ』として一族の間では汚点と言われていたが、腐っても伯爵家の次男坊。お金なぞ、家からそれなりにくすねてもバレない程度にはお金持ちなのだ。

だから、こうして奴隷を買い、己の身を守る事ができている。

しかし、それができるのも成人するまで。俺は、家を出ていけと言われていた。

子供の間は置いてやるが、成人したならばその義務もない、というわけだ。お金をくすねて奴隷を買う事ができるのは、家にいられる間だけ。成人してからはどうやって自分の身を守ろうかという感じだ。

まあ、アウレールやこれまでに仲間になってくれた護衛たちがいるから、問題ないとは思いますが……

「……違う」

俺が質問に答えると、アウレールに否定された。

どうやら求めていた答えとは違っていたらしい。

「奴隷を買うのはいい。それはナハトが自分を守る為に仕方ない事だと分かっている」

「じゃあ何が言いたいんだ？」

ハッキリ言ってくれないと分からない。俺が笑い交じりに答えると、彼は眉間に皺を寄せた。

「『壊れ者』を進んで受け入れる、その行為の事だ……！」

「ああ、そういう事」

「そういう事じゃない！ お前は全く事の重大さが理解できていない！ たとえお前がどれだけ優しくだろうと、彼らの心に刻まれた貴族や、人間に対する憎悪は滅多な事ではなくなる！ それが『壊れ者』なら尚更だ……ッ！ 彼らを自分の近くに置いておけば、そういう肥大したマイナスの感情が、思わぬ形で、刃となって向けられる事だつてあるんだぞ」

人目を憚らず大声を出し、これ以上なくらい真剣な形相でアウレールは俺を見つめていた。

「なんだよアウレール。もしかして心配してくれてんの？ 俺の事をさ」

押撤うように言うと、グイッと強い力で胸元を掴まれた。

俺とアウレールとの間には二十センチほどの身長差があり、少しだけ踵が浮いた。

これは決して、まともな奴隷と主人の関係ではない。砕けた口調、乱暴な態度。普通の貴族相手にアウレールが同じ行為をすれば間違いなく、ただでは済まないだろう。

けれど、俺はそれを咎めない。

落ちこぼれでどこにも居場所を得られなかった俺は、己を守る手段としての奴隷を欲すると同時に、本当の家族のような、友のような存在を欲していた。

歪な関係である事は理解している。

しかし俺はアウレールに自分と対等な関係でいる事を許している。むしろそうしろとまで言っていた。

「いつも言っているよな、ナハト」

必死な表情でアウレールが言う。

「オレたちエルフは、恩讐を決して忘れないと」

それは、アウレールの口癖だ。

「言っているね」

「情けと恨みは、ずっと心の中に残る。オレも忘れられないほどの恨みを抱いた事があるから分かる。あの兄妹を、引き取るな」

「どうして」

「あれは恨みに駆られたヤツの目だ。この世の全てが悪に見える。きつとお前が情をかけたところで疑心が増幅するだけ。だったら、見なかった事にするのが賢明だ」

いつになく真剣な眼差しだった。

どうやらアウレールは、俺に終始殺意を向けていた『壊れ者』の獣人の兄妹が気に入らないらしい。でも、もう返答は決まっていた。

「やだね」

「ナハト！」

アウレールに怒鳴られる。

しかし、俺は申し訳ないと思うどころか、笑みをただただ浮かべるだけ。

「もし俺に心を開いてくれなくても、それはそれで構わないよ」

奴隷を引き取ったら、帰る場所がある者は、健康状態を改善させてから解放している。

それほど警戒心や敵対心の強くない者は、俺の護衛を一定期間務めてもらい、そのあとに解放する事もある。もとより、無理に拘束したり、更生させたりするつもりはないのだ。

情けは人の為ならず。

直接奴隷が俺に何かをしてくれなくても、彼らへの行為が巡り巡って俺の助けとなればいい。護衛は欲しいが、必ずしも引き取った奴隷全員がそうなってくれるとは限らない。

そんな考えで過ごしていたら、一定数の者達が俺の側に残ってくれるようになった。アウレール

もその一人だ。

「それに――」

そう言っつて、俺は指を差す。

その先には、アウレールがいる。

「お前がいるじゃん？ いざという時は、守ってくれよ。頼りにしてるよ？ アウレール」

彼は言い返せないだろうと分かった上で、俺は言った。

狡いと思う。でも、悪いとは思わなかった。

「……オレは忠告したからな」

アウレールは小声でそう言い捨てる。

本気で止めたいなら、口頭での説得ではなく、物理的な方法を取ればいい。

けれどそうしないのは、きつと、アウレールなりの同情をあつての獣人の兄妹に向けていたからだろう。

彼も、元々は奴隷館に売られた奴隷であった。自分が住んでいた村の人間に、売られたのだ。

魔法の扱いに長けたエルフの一族でありながら、『氷』の魔法しか扱えない出来ない『エルフ』

であったからと、いつか言っていた。彼も『壊れ者』であった。

きつとそれが理由で、危険と分かっているにもあの兄妹を心の底から拒絶できなかったのだと思う。

貴族なのに魔法が使えない俺も、『壊れ者』と聞くと変な同族意識が湧く。

欠陥がある故に疎まれ、苦しい思いをしてきた気持ちは痛いほど分かるのだ。だからこそ、『壊

れ者』を好んで買っている。

「はいはい。忠告どーも」

適当な返事をしながら俺は帰路についた。

新たに二人も仲間がやってくる。

準備しておかないと、考える俺の足取りは軽かった。その様子を見て、アウレールは呆れ交じりの嘆息をもらす。

なんだかんだ言つて、俺はこの生活が好きだった。

第二話

アウレールの反対を押し切り、『壊れ者』の兄妹を奴隷商の男から引き取ってから、ひと月が経った。彼らとこのひと月、共に過ごしたものの、アウレールの忠告通り、彼らは俺に心を開いてはくれなかった。

むしろ、その逆。

俺が優しく振る舞えば振る舞うだけ、彼らとの距離は遠くなった。

俺よりもずっと幼い二人の兄妹。

まだそれほど長い時間を生きたわけではないのに、まるで世の中に何も期待していないような、昏く濁った瞳をしている。そして、それはいつまで経っても変わらなかった。

奴隷は、通常主人と奴隷契約を交わす。

その契約とは刺青のような印であり、主人と奴隷の身体に刻まれている。印がある限りは、奴隷は主人に逆らう事ができない。

見世物のように奴隷に首輪を付けたりする者もいるが、それは一部であり、俺は首輪なんてものは付けていなかった。

獣人の兄妹には屋敷の中で面倒事は起こさないように、とだけ言い付けて、あとは自由にさせて

いる。

血の繋がりのだけの家族は、俺が奴隷を多く囲う事を特に咎める気はないようで、こちらに害がなければ勝手にしろというスタンスだ。

俺が歩み寄ろうとしても、彼らは一步近づけば二歩後退する。故に、最低限の食事を与え、たまに会話をするに留めていた。そんな日々が何日か続いたある日の事。

「……うん？」

窓から差し込む光の眩しさで、意識が覚醒し、ベッドから起き上がる。

するとデスクの上に、置き手紙のようなものが置いてあった。

吹き飛ばないように重石がのせられた置き手紙には、酷く乱雑な文字が並んでいた。

目を凝らしても、なんと書いてあるのか分からない崩れ切った文字で書き綴られている。

誰がそれを書いたのか、俺には心当たりがあった。

「あの二人、か」

脳裏に浮かんだのは、ひと月前にやってきた獣人の兄妹であった。

俺が住居としてこの屋敷——ツエネグイア伯爵家には現在、奴隷館から引き取った護衛が、獣人の兄妹を除いて、五人住んでいる。

かれこれ三年の付き合いになるアウレールとは特別親密であるが、他の者たちとも、そこらへんの貴族と奴隷よりは、よっぽどマシな関係を築けていると思っている。

もちろん、彼らがどれくらい字を書けるのかも把握しているつもりだ。

俺の護衛をしてきている五人の中に、文字がここまで書けない者は存在しない。

そして何より、俺と面と向かって言葉を交わす事を拒む者は、獣人の兄妹だけだった。

「……ん」

眉根を寄せて、置き手紙を手取る。

辛うじて読めた字は、『大切な話』『三人で』『待ってる』『いつもの森』この、四つだけだった。

「大切な話、ねえ」

いつもの森とは、彼らが頻繁に出掛けている場所の事だろう。

その事は知っていたが、こちらから歩み寄ると彼らが離れていつてしまうので、見て見ぬ振りを続けていた。

「そんな話に心当たりはないんだけども」

今までそんな素振りはないが、もしかすると彼らは俺を味方と捉えてくれたのかもしれない。そして、頼ろうとしているのかもしれない。

本来、奴隷とは主人に一方的に尽くすだけの存在。だから、もし彼らが頼ってきたとしても俺がそれに応える必要はない。

でも、俺はそうは思わなかった。

応える事でよりよい関係が築け、俺の護衛となってくれるならば、それに越した事はない。無理に側に置くつもりはないが、やはり味方になってくれるのは嬉しいのである。

魔法が使えないだけで、何故そんなに護衛を必要とするのか、事情を知らない人間には理解でき

ないかもしれないが、俺の敵は魔物だけではないのだ。

『出来損ない』である俺を快く思わない親族の連中、特に過激な思想を持つ者が何度か誘拐や暗殺を仕掛けてきた事があった。

彼らから逃れ生き延びる為に、俺は奴隷を必要としている。

その親族連中は、俺の生家であるツエネグイア伯爵家よりも家格が高く厄介で、ギルドや騎士団に依頼し護衛を雇っても、裏で根回しされる危険があった。

俺の父親も知らぬ存ぜぬの態度を貫いていて、頼りにならない。親族を敵に回してまで俺を守る必要はないと思っているのだろう。母親は、俺が小さい頃に既に他界してしまっている。

『大切な話』っていうなら、行くしかないよね」

どんな話なのかまだ分からないが、故郷に帰りたいたいと言われる可能性は大いにある。

これまでも、多くの奴隷とお別れをしてきた。

護衛は確かに必要だが、そう言われたら引き止めはしない。

冷めた家族関係の中で育ち、友達すら一人もいなかった俺は、実のところ、ツエネグイア伯爵家の『落ちこぼれ』としてのナハトではなく、ただのナハトとして見てくれる人間を欲しているだけなのかもしれない。

貴族と奴隷としてではなく、対等な一人の友人として、彼らに向き合いたいと思っている。

故郷に帰っていった者の中には、別れる時に、恩は忘れないと泣きべそかくヤツや、お礼を言うヤツがいた。

彼らから告げられる感謝の言葉が、少しだけ、自分の為に奴隷を囲っているという罪悪感を薄めてくれている。

本当に感謝すべきは俺のほうだというのに……

そんな事を考えていたら、過去にお別れをしたある奴隷の事をふと思いつ出した。

今まで引き取った奴隷は、もちろん全員覚えていて、その中でも彼は特に印象に残っている。出会った時はガリガリに痩せていて、生気のこもっていない目をしていて。

長い間食事を与えられていなかったので消化器官が弱り、普通の食事は食べられなかったから、俺が自ら粥やスープを作り、食べさせてやった。

彼が元気になるってからは、料理の作り方を教えてあげたり、俺が体調を崩した時は粥を作って看病してもらったり、沢山の思い出を一緒に作って楽しかったなあ。

結局、彼は料理をしながら、世界を見てまわる旅がしたいと言って、俺のもとを離れていつてしまった。

『絶対会いにくるから、また一緒に飯を食おう。なんなら次は、俺が自力で稼いだ金で、ナハトに奢ってやるから、待つてるよ』

別れ際にそんな事を言っていたけれど、彼は元気だろうか？

いつかあの言葉通り、一緒にご飯でも食べれたらいいな。

こんな風にかげがえのない絆を築ける事があるから、俺はできるだけ誠実に奴隷たちに向き合いたいと思っているのだ。

獣人の兄妹がどんな話をして、受け止める準備はできている。

「もしかしたら別れの挨拶あいさつかもしれないな。まあ、そろそろ健康状態もよくなってきた頃だし、丁度どいいか」

憔悴しやうすいし切っていた獣人の兄妹の身体はこのひと月で回復し、もしこのまま心を開いてもらえないようなら、解放したほうがいいのではないかと考えていた。

もし別れの挨拶なら、これはきっと俺と獣人の兄妹にとつていい機会になるだろう。

そんな事を考えながら、置き手紙をポケットにしまう。

「これで最後になったとしても、別れの前に打ち解けられるといいなあ。笑って一緒にご飯でも食べられたら最高だね」

思い返してみると、アウレールもはじめは彼らみたいな感じだった。

今じゃすっかり丸くなったけど、鋭利えいりな刃物を思わせるヤツで、施しほどこは受けないとか言って食事すら拒絶きょつぜつしていた。

本音を晒して、沢山の時間を一緒に過ごした。歩き疲れた時なんか、足が棒のようだからと言っておんぶしてもらった事もある。

まるで本当の家族のように過ごして、気付けば今の関係に落ち着いていた。

アウレールがいらない事はもう考えられないくらいの、掛け替えのない友人だ。

「さあ、迎えに行くとしますかね」

そう言っ、俺は部屋の扉を押し開けた。それが、破滅はめつへの第一歩だと知らぬまま。

運命の歯車を止めていた大きな岩は磨すり減り続けていた。歯車を動かすまいと止めてはいるものの、少しずつ欠かけていき、砕くだけるのは時間の問題だった。

タイミングが、今だったというだけの話。

いつも護衛ごゑいをしてきているアウレールが外出しているタイミングで手紙が置いてあった事に考えが及およばないまま、俺は破滅の道を歩み始めた。

置き手紙を確認してから数十分後。

件の森へと辿り着いた俺は、獣人兄妹を捜しに来たというのに、どうしてか思わぬ状況に陥っていた。

「で、これは一体なんの真似かなあ？」

大粒の脂汗で額を濡らしながらも、精一杯の虚勢を張って俺は彼らに問い掛けた。森に到着すると、何故か見ず知らずの男たちに囲まれてしまったのだ。

「ツエネグイア伯爵家の奴隷狂い」

それは、一部の奴隷商たちの間で呼ばれている俺の蔑称だ。

『壊れ者』と揶揄される不良品を、喜んで引き受ける俺を表した言葉。

前に立ちはだかった男に、剣の切っ先を向けられる。

商人も通らないこんな森の中で、たまたま盗賊に遭遇したとは考えづらい。

何より彼らは俺の事を知っている。計画された犯行。それはもう、疑いようがなかった。

「心当たりはあるだろう？」

「いいや？ ……これでもお天道様に顔向けできない生き方は、していないつもりでね」

「ほう。それはそれは。『壊れ者』を買い漁っていた人間の言葉とは思えないな。まさか、善意を持って欠陥のある者たちを引き取り、共に過ごしてきたとも言うのか？ どうせ、奴隷の事など人とも思っていないんだろう。『壊れ者』を好んで買うのも、ただ値段が安いからや、変わった奴隷が欲しいからとか、そんな理由に決まっている」

すぐに襲い掛かってこない辺り、相手はどうやら会話をしてくれる気はあるらしい。

「可能な限り、神経を逆撫でしないように慎重に言葉を選ぶ。」

「そんな事は——」

「嘘だッッ！」

しかし俺の言葉は、突如発せられた叫び声によって、遮られた。

「お前は……貴族だ。僕たちを騙そうとしてるんだ。エルフのあの男はすっかり騙されて、いいように利用されてる。僕たちを騙す為に、ああやって優しく振る舞ってたんだろうがッ！」

陰から出てきた少年少女。声を荒らげたのは少年のほうだった。

俺は彼らに見覚えがあった。彼らは、捜していた獣人の兄妹だったのである。

「そう、取られるか……」

思わず苦笑いする。

『——全てが悪に見えている』

アウレールの言葉が不意に脳裏をよぎる。本当に、その通りだった。

よくよく考えてみれば、今まで運がよすぎたのだ。

少し考えれば、貴族に恨みを持っている奴隷にはめられて、危険な目に遭うかもしれない事は予想できたはず。しかし、俺はそれをしなかった。否、そんな事が起こると考えたくなくて、思考を放棄していたのだ。

「キツいなあ……！」

俺を囲んでいる数人の男。

彼らは全員が特徴的な見た目をしている。フードのついた服を着ていてよく見えないが、おそろく兄妹と同じ、獣人だろう。そして、いたぶられたような生傷が服の隙間から見え隠れしていた。

彼らはきつと、元奴隷。

自分たちに助けを求めた獣人の兄妹を解放するついでに、『壊れ者』を好んで引き取る胸糞悪い俺を始末しにきた、とそういうわけだ。

護衛が一人もない絶望的な状況と、俺にとっては唯一の希望だった奴隷たちに命を狙われているという現実にも、ため息がもれた。

しかし、俺に諦めは存在しない。

絶望的な状況ではあるが、まだどうにかする方法はあるはずだ。

「俺はまだ死にたくないんだ」

一度たりとも奴隷に酷い扱いをした事はないし、彼らと対等に接してきたつもりだった。

けれど、それを言ったところで無意味なのはよく分かっている。

反論したり、論じたりするのは、むしろ逆効果かもしれない。

どうするか考えつつ、俺は懐にしまっていた護身用の短剣を取り出す。

「そう易々と『生』を手放しちや、俺のワガママに今まで付き合ってくれてたヤツらに申し訳ないじゃん」

それは、口をついてでた本心だった。

奴隷を必要とし、引き受け始めて早五年。本当に、今まで色んなヤツがいた。

警戒心の強いヤツ。馬鹿正直にありがとうと感謝を言ってくれるヤツ。

あの兄妹のようにずっと心を開かず、そのままお別れをしたヤツ。本当にいっぱい、いた。

こんなところで死んでしまっただけは、自分の人生の時間を使って、俺を守ったり、支えてくれたりした彼らにあわせる顔がない。

「だから——」

すう、と思いい切り息を吸う。

そして威嚇するように叫んだ。

「死ぬわけにはいかないし、まだ死にたくないんだよ！」

俺が腹の底から響かせた大声に、ほんの少し萎縮した様子を見せる者もいたが、男たちの敵意は揺らがない。

不退転の決意で、俺は短剣を構える。その瞬間、前にいた男の視線が、俺の奴隷契約の印が刻まれた右腕に釘付けになる。あいつらの目的は、おそらくあの兄妹の解放と、俺を殺す事だ。

でもきつと、兄妹の解放のほうが優先順位が高いはず。

最悪、腕はなくなってもいい。右腕に男たちの注意を引き付けている間に、なんとか——
そう思った直後だった。

「あ、がッ!？」

突然、矢が飛んできて俺の右腕を貫いた。激しい痛み、顔が歪む。やはり生き残る事は絶望的
かもしれない。でも、せめて命が消える瞬間までは、悪あがき……させてくれッ!

「なめる、なあああああああああアアア!」

短剣を片手に、俺は獅子の如き咆哮しながら駆けた。



それから、何分経過しただろうか。

気付けば腹には穴が開き、奴隷契約の印が刻まれていた右腕は失われ、俺は大の字に倒れ込んで
いた。どくどくと血が際限なくもれる。

喉からはひゅーひゅーと、風が吹いているような変な音がする。

声は上手く出ない。きつと、喉を限界まで酷使したせいだ。奮い立たせるように、叫び続けた
から。

大声で助けを求める事すら、今の俺には許されてはいなかった。

襲ってきた獣人は、既に側にいない。

助かる見込みのない俺に彼らはトドメを刺していかなかった。

最後まで苦しんで死ね、という事らしい。

いっぱい、いっぱい殴られて、腫れ上がった顔。ほんの少しだけしか上がらないまぶたを上げる
と、綺麗な青空が見えた。

でも、それは一瞬で遮られてしまう。大きな影が俺の視界を覆ったのだ。

「だから、言ったんだ……! 『壊れ者』を受け入れるのは危険だと……!」

それは苦痛に満ちた声だった。少し高い、女性の声。

「誰も彼もが、お前の想いを真正面から受け入れる事はない、理解してくれるはずはないと分かっ
ていたのに……いつかこんな日がくると分かっていたのに——これじゃ、護衛失格だ……!」

慟哭が聞こえる。

今まで一度も聞いた事がない声だったけれど、何故か彼女の声と口調に無性に親近感が湧いた。
うっすらと開いた瞼から女性の顔が見えた。人形のように綺麗な、作り物めいた容姿をしている。
性別は違うのに彼女の言葉を聞いていると、彼が脳裏に浮かんで仕方がなかった。

だから俺はつい、その名を呼んでしまった。

「あ、うれー、る」

「やっぱり分かる、よな。お前が、私の事をちゃんと見てくれていたのは知っていた。だから、心
を開いたんだし、な」

どうして、いつもの姿じゃないのか。男の、姿ではないのか。

そんな疑問が頭の中を渦巻いていたけれど、それを尋ねる余裕は今の俺になかった。不意に俺の頬の上に水滴が落ち、顔にできた生傷に痛みが走る。

雨なんて降っていないのに、この水はどこから降ってきたのだろう。

一瞬そんな事を考えたが、その答えはすぐに分かった。

「何、ないてん、だよ」

最後の力を振り絞り、俺は笑う。

そんなに悲しまないでくれ。ほんの少し他の人より運がなかっただけだ。

生まれつき、魔法の素質がなくて、そのせいで、親族連中から恨まれたり、最後は騙されてこんな醜態を晒してしまっていたりするが、それでもアウレールが今、目の前にいるから、俺の人生も悪くなかったと思えてしまう。

「……な、あ」

俺の命の灯火は、もう消えかけている。

まだ、声を出せるうちに言いたい事を言ってしまうおうと思ひ、声を掛けた。

「……なんだ」

「たのみが、あるんだ」

「言ってみろ」

ぼやけた視界に映る彼女は、凄く悲しそうな顔をしていた。

「お、れの死体……どっか遠くに、埋めてほしくて、さ」

俺の言葉に、彼女の顔が歪む。

「死んだあとも、めった刺しに、されたくないじゃん……？ ほら、あいつら、いるからさ」

あいつらは、ツエネグイアの親族連中だ。流星に、死体蹴りは勘弁してほしかった。

「……断る」

しかし、アウレールから返ってきた答えは、拒絶だった。

「私はもう、お前の奴隷じゃない。だから、お前の頼みを聞く義理はない」

そう言っつて、アウレールは俺の右腕があつたはずの場所に目をやる。

肩から先が斬り落とされ、右腕は失われてしまった。もう奴隷の印も意味をなさない。

「そいや、そう、だったね」

「だから、私は私がしたいようにする」

そう言っつと、彼女は手のひらを俺の身体に押し当てた。

ひんやりとした感覚がボロボロに斬り裂かれた服越しに伝わってくる。

「あ、う、れーる……？」

何をするつもりなんだろうか。

彼女の名を呼んで聞いかけると、返ってきたのは聞き飽きるほど耳にしたいつもの口癖だった。

『『エルフ』は、恩讐を忘れない』

パキリ。

アウレールの手から冷気が生まれ、服が氷結し始める。

「お前だけは、何があっても助ける」

「何、して……」

「少し、ナハトは眠ってる」

服、傷口、手、足、全身に段々と氷が広がっていき、ただでさえまともに動かなかった身体の自由が完全に奪われていく。

「大丈夫。私が、必ず助けてやるから。だから——凍こらっていてくれ」

アウレールは、どうやら俺を助けるつもりらしい。

どうするのか見当も付かないが、どうせこのまま死んでいくのなら、彼女に身を委ねるのもいいかなと思った。

「少しのお別れだ。また、会えるから。だから、だから——」

そして最後の言葉は俺の耳には届かず、そのまま俺の意識は、闇に溶け込んだ。

第二章 落ちこぼれ貴族、覚醒す

第一話

何よりも先に、まず異変を感じ取ったのは嗅覚きゆうかくだった。

嗅かぎ慣れない匂においがして、意識かきせが覚醒する。

目を開くと初めに視界に入ったのは、木目調の天井だった。

「ここ、は」

——どこだったっけ？

ポツカリと記憶が抜け落ちている。でも緩やかに、欠けていた記憶おぼえが蘇よみがえり始める。

斬り落とされた右腕。刺し貫かれ、穴を開けられた腹。

そして、俺を助けんと凍らせた一人の——エルフ。

「そう、だ……あうれー、るッ!」

慌あわてて上体を起こそうとし、ギシリと木製のベッドが軋よむ。それと同時に身体からだに鈍にぶい痛みが走った。筋肉痛の時に無理矢理身体を動かそうとする痛みいたみに似ている。

「目覚めて早々、騒さわがしい。病み上がりなんだ、静かにしておけ——なあ？ ナハト」

声はすぐ近くから聞こえた。俺が寝かされていたベッドのすぐ真横に彼女が立っていた。アウレールはベッドを背もたれにして腕組みをしながら座っている。

「……アウレール」

「ん？」

名前を呼ぶと——彼女は振り返った。

見慣れた男の顔ではなかったけれど、面影が残っている。

何より、口調がまんまアウレールだ。

「他の、みんなは」

「目覚めてすぐの言葉がそれ、か。まあ、ナハトラしいか」

あの獣人兄妹はともかく、他にも俺が囲っていた奴隷が五人いた。ここはツエネグイアの屋敷ではないし、彼らがどうなったのか気掛かりだった。

「他のヤツらは、各々どっかに行った」

「そっ、か」

俺の右腕は失われ奴隷契約が切れたのだ。

屋敷に残しておく理由もないし、元奴隷である彼らにとって貴族の側というのは決して居心地がよいものではないだろう。

「でも、伝言を預かつてる」

「ん？」

俺は首を傾げる。

「悪くはなかった、とき。人らしい生活をさせてくれてありがとう。いつか、恩は返すと、そう言っていた」

「……そっか」

アウレール一人だけになってしまったのが、少し寂しくはあるけれど、感傷に浸るより先に彼女には聞かなければならない事がまだまだいっぱいあった。

「ところで、アウレール。ここはどこなんだ」

「一体何から説明したらいいのか……」

「……?」

ツエネグイア伯爵領なのかを尋ねようとすると、アウレールにそれを遮られる。

そして、彼女はこれ以上なく真剣な眼差しで俺を見据え、口にした。

「あんな、ナハト。今から私が言う事は間違っても冗談の類いではない。だから、落ち着いて聞いてくれ」

まず初めに意味深な前置きをされる。

だから、冷静に言葉の続きを待つ。

「あの時、瀕死の重症に陥ったお前を私の氷魔法で凍らせ、一時的に心臓と出血を止めた。普通は氷漬けなんかにしたら身体が壊死して死んでしまうが、私の魔法で作った氷はちよつと特殊だな。凍らせた肉体の鮮度を保ちながら、長期間、仮死状態にする事ができるんだ。ただお前の状態

は、とても酷いものだった。私は村の人間に売られた身だが、信頼できるエルフに頼み込んで、魔法に長けたエルフを何人か紹介してもらった。しかし大半の者に諦めると言われてしまつてな。お前を治せる者を探したり、治療法を見つけるのに手間取つたりして、少しばかり時間を要してしまつた」

「……というと？」

「あの日から、一年が経っている」

少しだけ、驚いた。

でも、なんとなく長い時間が経っているのだろうという気がしていた。

「それと、ここはツエネグイア伯爵領から遠く離れた地。森に囲まれた、エルフの村だ。だから、お前の親族に襲われる心配はない」

アウレールは、嘘が吐けない人だ。意固地で、頑固で、そして誠実なのだ。

だからおそらく、彼女の言葉は本当なのだろう。

「一年、かあ……」

感慨深く言葉をもらす。

「一年の失踪しそくって事はさ、俺はもう死亡扱いされてるかな？」

「そうかもしれないな」

不敵に笑うと、アウレールは笑つて返してくれた。

俺にとつては、死んだ扱いにされるほうが都合がいいのだ。一年を捨てる事で、ツエネグイアか

ら解放されるなら安いものだろう。だから驚きこそすれ、悲観はしなかった。

「助けてくれてありがとう、アウレール。それと——ただいま」

そう言うと、アウレールは仕方がないというように笑つてくれた。元々、貴族の地位なんて捨てたくて仕方がなかった。

親族連中に狙われる日々。それから解放されたと思うと、今まで感じた事のない安心感を覚えた。気分は、悪くない。

「じゃ、重苦しい話はここまで！」

一年眠りっぱなしなら、そりゃ身体も動かしづらはずだと納得しつつ、気を付けながら上体を——二本の腕を使って起こす。

「どうかさ、これ作ってくれたのってアウレールだよね？」

本来ならば、肩から先は存在していないはずの右の腕を伸ばした。

それは、透き通つた薄青色の氷で作られている。

アウレールは氷魔法だけは得意としていたが、こんな器用な真似まねもできるんだなあと感心していると、何やら気まずそうな視線を向けられた。

「……ああ。その腕の事も説明しなくちゃいけないんだが、その前に……外見が、だな……まあ、これは説明するより自分の目で見たほうが早いだろう。ほら」

アウレールはそう言つて、魔法で大きな氷を俺の前に作り出す。

氷に映つた自分の姿を見てみると、黒だつたはずの髪の毛がなんと真っ白になっていた。



「何故、そうなってしまったのかは正直わからない。でも……その髪型も似合っているぞ！ いい感じだ！」

必死に褒めようとしてくれるアウレールがなんだか面白くて、笑いながらお礼を口にしようとした刹那。

大きな衝撃音が一带に響き渡り、続けて地面が少しばかり揺れ動く。

『ジャヴァアリーだッ！』

突如、外から切迫した大声が聞こえてきた。それを聞き、アウレールの表情が厳しいものへと変わる。腰を下ろしていた彼女は無言で立ち上がった。

「……続きの話は、またあとにしよう。悪いが、用事ができた」

そう言っつて、アウレールは扉のほうへと向かって行こうとする。俺はそれを阻むべく声を上げた。
「アウレール」

身体をぎこちなく動かし、ベッドから足を出そうともがくが、一年間動かす事なく固まったままだった身体は上手く動いてはくれない。けれど、彼女は俺のそんな行動で何を言いたいのか察してくれたいらしい。

「……ダメだ。ナハトはここで寝ている」

彼女がかぶりを振った。

「アウレール」

懲りもせず、もう一度名を呼ぶ。ふるふる足が震える。

「懸念材料は近くに置いておいたほうがいい。そうは思わない？」

それは、アウレールがいなくなれば俺は一人で勝手にこの部屋を出ていくぞという意思表示であった。

「……下手な真似をしない事。私の言葉には従う事。それが、ついてくる条件だ」

「オーケー。流石アウレール、物分かりがよくて助かるよ」

俺の性格をよく知っていて、本当にやりかねないと理解しているからか、彼女は早々に折れてくれた。アウレールは俺に歩み寄り、少しだけ屈んでくれる。

どうも、肩を貸してくれるらしい。

「悪いね」

「悪いと思うなら部屋でじっとしていてくれ」

「それは無理」

疲れ切った面持ちでアウレールが言うも、俺は即答する。

深い深いため息が聞こえてきたが、気のせいという事にしておこう。

ほんのちよっぴりだけ申し訳なく感じてしまった。

肩を貸してもらって尚、足取りは覚束ない。けれど、ここがどこなのか。アウレールは何をしに行くのか。聞こえてきた言葉——ジャヴァリーとは、なんなのか。

それらに対する好奇心を、抑える事など不可能であった。

第二話

扉を押し開けた先に広がっていたのは青々とした自然と、それと共存するエルフたちの姿だった。樹齢何年なのか分からない大きな木が平然と村の中に生えており、極力人の手は加えられていない自然の中で彼らは生活していた。

木々を避けるように点在する木造の建物は、違和感なく景色に同化し、元々そこにあっただかのようにならぬでいる。

ツエネグイア伯爵領ではまずお目にかかれぬであろう壮大で不思議な光景であった。

そしてエルフたちは何やら見慣れない格好をしている。

「アウレール！」

小屋を出るや否や、怒声が聞こえてきた。

弓矢を手にした狩人のような格好の男がこちらに駆け寄ってくる。

「ジャヴァリーが出たってのにてめえは何して」

責め立てるように言葉を続ける男。

しかし、彼はアウレールが肩を貸している人物——俺の存在に気付き、言葉を呑み込んだ。

「コイ、ツは……ああ、凍っていた死にかけか。あの状態から目が覚めるとは、てめえはよっぽど

悪運の強い人間らしい」

侮蔑の感情が乗せられた言葉。

一部の人間は特別容姿の整った『エルフ』を、奴隷として高値で取引していたりする。それもあって人間と、彼らの溝はやはり深いらしい。

そもそも村の人間に売られたアウレールが連れ帰ってきた、素性の分からない俺に対して、当たりが強いのは当然か……

今ここに滞在できているという事は、アウレールと村の人たちの関係は修復したのだろうか。

「目が覚めたってんなら、てめえには言っておかねえといけねえ事がある」

そう言っつて男は手にしていた弓を背に担ぐ。そして、視線は俺からアウレールへと移る。

ほどなくして彼は彼女を睨め付けながら口を開いた。

「……おい。何をボサツとしてる。アウレールはさつさとジャヴァリーの討伐に向かえ。それが約束だろうが」

「……分かってている」

男の言葉により、視線を落とすアウレール。彼女は俺にだけ聞こえる小さな声で言った。

「……一人で立てるか？」

厄介なヤツに見つかった。

アウレールの表情はまさにそう言っているようで、俺は苦笑いしながら返答する。

「大丈夫。小屋の扉にもたれられるし、心配はいらないよ」

俺は彼女の肩から手を離し、すぐ側の小屋の扉にもたれかかる。

「……すぐ、戻る」

それだけ告げて、アウレールはどこかに向かって走り出した。

ジャヴァリーという名の何かを退治しに行くのだろう。

小さくなっていく背中を眺め続け、米粒程度になったところで俺はエルフの男へと改めて向き直った。

「自己紹介はある？」

「人間の名前なんて、聞きたくもねえ」

「そっ、か」

敵意が丸出した。

ジャヴァリーが出たというのがあまりいい話ではないんだろうなと、なんとなく予想はできていたものの、俺に聞かないという選択肢はなかった。

「ところで、さつきから言ってるジャヴァリーって？」

「ジャヴァリーってのは魔物だ。こちら辺によく出没する。作物を荒らすから見つけ次第、討伐するのが決まりだ」

意外にもまともな返答が返ってきた。

不必要な問い掛けは嫌うタイプだと思っていたが、違ったか……？

「そして、アウレールがジャヴァリーの討伐に参加する事が、てめえが目を覚ますまでエルフの

村——ここで匿^{かくま}ってやる条件だった」

「……………」

『だった』と、男はその部分だけ声を大きくして言った。
あえてそこを強調する辺り、今日にでも出ていけと言われるのかもしれない。

人間を近くには置いておきたくない。その意思表示なのだろう。

「どうやってアウレールを誑^{まど}し込んだかは知らねえし、聞く気もねえが、目が覚めたんならあの女共々、さっさと出ていけ」

離れたところにいる複数人のエルフからも、先程から軽蔑^{けいべつ}の視線が向けられていた。きっと、男の言葉はこのエルフの総意なのだろう。

でも、今の身体がまともに動かない状態でここを追い出されるわけにもいかなかった。

「……なあ」

「ダメに決まってるだろうが」

もう少しばかり留まらせてはもらえないかと頼み込もうとするが、先回りをするように拒絶の言葉が返ってきた。

「エルフが人間からどういう扱いを受けてるか、知らねえてめえじゃねえだろ」

何せ、実際に飼^かつていやがったんだから。

そんな皮肉めいた意図が伝わってくる。

「これでも十分特例なんだ。ごねるってんなら殺すぞ？」

「……流石に、それは勘弁してほしいね」

そう言うって向けられた殺気は、容赦のないものだった。

冗談の類ではない。生かされたこの命。決してドブに捨てるわけにはいかない。

俺は口ごもった。

「それにしても、馬鹿な女だよなあ」

そう男は言った。

「奴隷をしていた頃に、ちょっと優しくされた程度でここまで必死になるんだからな。村には売られて奴隷にされ、買われた先で出会ったご主人様に嬉々として尻尾を振ってやがる」

男は言葉を続ける。

「馬鹿と言わざるを得ないだろう？ 自身を飼っていた貴族のガキを、まるで大事な家族のように想い、助けようと奔走^{ほんそう}してやがったんだ。おれらは口を揃^{そろ}えて何度も言^いってやったさ。てめえは哀れだ、と。それにもかかわらずあいつは考えを一切変えようとしねえ。そんなヤツを馬鹿な女と言わずしてなんと言い表す？」

堪^{こら}え切れない苛立ちを覚え、額に青筋がうっすらと浮かび上がるのが分かる。

けれど、理性はまだ働いていた。

俺が意識を失っている間、きつとアウレールはもつと酷い罵声^{ののしり}を浴びせられていたはずだ。しかし、ここを追い出されるわけにはいかなかったから、我慢するしかなかっただろう。

おそらく相当な苦勞をして彼女が作ってくれたであろう居場所を、失うわけにはいかない。

言い返すなど自身に向けて必死に言い聞かせ続ける。

でも、どうしても一言だけ、これだけは言いたかった。

「アウレールは、優しいヤツだよ」

意地っ張りだけど、凄く優しい。

アウレールの事をよく知っているからこそ、言葉が口について出てしまう。

「そりゃ、てめえの目にはそう映るだろうよ。飼犬と主人。ご主人様に尻尾振るのが飼犬の役目なんだ。てめえにやさぞかし従順じゆうじゆんに映ってただろうなあ？」

「……理解してもらえない事は分かっている。でも、俺はあいつを——！ ツ、あ、がぐツ!？」

奴隷として扱ったつもりはない。

そう言おうとするも、不意に男の手が俺の顔を思い切り掴んだ。

ぐぐぐと身体が持ち上がっていき、十秒も経たないうちに足が地面から離れてしまう。

「いいか、よく聞け。ぬるま湯に浸かり切った貴族のクソガキ」

男は憤怒に満ちた血走った瞳でこちらを射抜く。

「おれからしっちゃ、てめえも、他の人間も。どいつもこいつも皆同じなんだよ」

力強く握られた手の中から、ビキリと骨が軋む音が響く。

頭が割れると思うほどの痛みだった。

「てめえもアウレールを……エルフを奴隷として利用してたんだろうが？ てめえも、他の貴族も変わらねえんだよ。それなのにあいつは優しいと悦えちに入ってやがる。自覚しろよ！ てめえも、他

のヤツらと同じ、いいように奴隷を利用していたクズだよ！」

ドガンツ！ と、背中に強い衝撃が走る。

思い切り壁に押し付けられたのだと、遅れて俺は理解した。

「……特に、てめえみてえなヤツが一番タチが悪い。ハッキリ言ってやろう。悪を見続けたヤツらは、少しの善を見せられた時、たとえ相手が悪人だろうとそいつを善人と勘違いしやがるんだ。するとそいつは、勘違いの視線にあてられて、まるで己が善人であるかのように錯覚さくかくし始める。そして、間違いだらけの偽善は横行する。奴隷という存在を認めている事自体が罪だという事に気付くうとすらしやがらねえ。全く、救いようのないヤツらだろ？ ……それが、てめえの正体だ」

「……………」

すぐには言葉が出てこなかった。

何故なら、その通りだったから。奴隷である彼らに、俺は己を守ってくれと話を持ちかけた。それは、利用している事に他ならない。

奴隷として見ていなかろうが、彼らからしてみれば、俺は主人で、彼らはどこまでも奴隷なのだ。だけど。だけど……

「……わがつ、でる」

押さえ付けられた状態のまま、俺は絞り出すように声をもらした。

「わがつ、でる。けど、俺だつて自分を守る為に必死だったんだ！」

確かに俺が今までやってきた事はエゴでしかない。

けれど、自分の命を守って欲しいと思うのは、孤独を癒したいと思うのは、そんなにいけない事だろうか。

これまでの俺の境遇や奴隷たちとの関係性を知らないのに、悪だと決めつけられるのは、どうしても納得がいかなかった。

「必死だったら、何もかも許されるつてか？ 随分と都合のいい頭をしてるようで羨ましい限りだ」

『エルフ』の男が言う。

だったら、俺は大人しく殺されたらよかったのかよ……

理不尽に親族連中の都合で殺されて、屍を晒したらよかったのかよ。

「ふざ、けんな……！」

左の手で、俺は男の腕を思い切り掴んだ。

「お前に、何が分かる。俺の、何を知ってる」

ふつふつと沸き立つ感情。

これは、怒りだった。

まるで俺の気持ちに呼応するように、周囲の気温が下がっていく。

パキパキ、と何かが凍る音が聞こえる。足元を見ると、俺の立っている地点から、少しずつ氷が地面に広がっていた。

「知らねえよ。人間の事情なんざ、知りたくもねえ」

「なら」

耳元で、ひゅう、と冷えた風が吹く。

パキリ。

それは、始まりの音色だった。

次の瞬間、俺の右手の指先から氷が生まれ、掴んでいた男の腕に侵食を始める。

パキリ、パキリ、と音を立ててそれは範囲を広げた。

「チイツ」

堪らず、男が舌打ちしつつ飛び退く。

「——放っておいてくれよ」

自分の声がやけに辺りに響いた。

我に振り返り周りを見渡すと、自然豊かなエルフの村はいつの間にもやら、白粉でも振り掛けたような氷原世界に様変わりしていた。

それは、息を呑むような光景だった。

俺が景色に見とれている中、目の前の男は別の事に気を取られていた。

俺を、ひたすらに凝視していたのだ。

「こいつの魔法か……？ いや……兆候は一切なかった。それどころか、アウレールの話じゃこいつは魔法の類は一切使えないはずだろうが……一体何が」

ぶつくさと、男が何やら独り言を口にしている。

聞き取ろうとしたけれど、酷い倦怠感がやってきて、上手く聞き取れない。まるで、身体から何かが抜けていくような、そんな感覚。

「あ、あれ……」

視界が揺らぎ、思考に霧がかかる。

身体が言う事を聞いてくれなくて、前のめりに倒れ込む。気が抜けたら、急に凄く寒くなってきた。

薄れゆく意識の中で、視界が最後に捉えたのは、透き通った氷の大地。自生していた雑草も一緒に凍っている。それはどこか幻想めいていた。

——綺麗、だなあ。

思わずそんな感情を抱くが、それが、言葉として口に出される事はなかった。



「何、が、あつたんだ……」

慌てて戻ってきたのだろう。

肩で息をするアウレールは、人為的に創り出された眼前の光景に、目を見開いていた。

視界一面に広がる氷の世界——

時季外れの雪原。それは異様な光景だった。

「……よお」

不機嫌な声が彼女の耳に届く。

アウレールにとって聞き覚えのある男の声だった。

「……クラウドか」

狩人のような格好の男——クラウドへとアウレールは視線を移した。

片方の腕には布が巻かれており、声を掛けてきたという事は、彼はこの状況と無関係ではないのだろう。

そう確信した彼女は、問いただそうと歩み寄る。

けれど、それより先に彼が手のひらを開き彼女へと向けた。

待てよ。

そういう意図のジェスチャーだ。

「なあ、アウレール。あいつは、一体何者なんだよ」

クラウドの視線の先には、扉にもたれかかる一人の少年。

アウレールはナハトのぐったりとしている様子から、気を失っているのだと理解した。即座に駆け寄ろうとするアウレールであったが、それをクラウドは許さない。

「質問に答えろアウレール!」

「……どうい意味だ」

「どうもどうもねえ。てめえの頭ん中に渦巻いているであろう可能性の事を言ってるんだぜ?」

立ち読みサンプル
はここまで

「だから何が言いたいんだ」

「この光景。そしておれのこの腕」

そう言って彼は腕に巻かれていた白い布を解き、隠されていた部分をアウレールに見せつけた。赤黒く変色し、凍傷のような痕がくつきりと浮かぶその腕を。

「お前、それ……」

「全てあのがきがやった事だ。その上でもう一度聞く。あいつは何者だ、アウレール」

「ナハトがやっただと？」

「そうだと言ってるだろうが……!」

憤怒の表情を浮かべるクラウスが嘘を吐いているようにも、見えなかった。

そもそもエルフの村の大部分を凍らせる事ができる者など、アウレールの記憶の中にはほとんどいない。クラウスにはとてもできない芸当だ。

その事実が彼の言葉を裏付ける一因となっていた。

「だが……ッ」

ナハトは、魔法を扱う才能が絶望的でないのだ。それは、アウレールが誰よりも知っていた。

元より、魔法が扱えるならば奴隷を買う事はなかっただろうし、死にかける事もなかったのだ。

けれど、少し離れた場所での口論を傍観する他のエルフたちの責めるような視線で、クラウスの言葉が本当である事は、ほぼ確信に変わっていた。

ナハトが魔法が使えないならば、クラウスの言い分は真っ赤な嘘だ。けれど彼の言い分が正しい

ならば、何故、彼は今まで魔法を扱えないフリをしていたのか。

死にかけていたあの時、あの瞬間までどうして使う事を拒み続けたのか。

考えれば考えるほど、わけが分からなくなる。

何が正しくて、何が間違っているのか。アウレールは正常な判断ができなくなっていた。

「……どうも、てめえは本当に知らないらしい」

クラウスはゆったりとした足取りで件の少年——ナハト・ツェネグイアのもとへと向かう。

「何、を」

「これだけの事をやらかしゃがったんだ。相応の報いを受けるのが道理ってもんだろうがよ?」
殺意をこれでもかと放つクラウスの様子から、アウレールは彼の次の行動を察した。

「クラウス!」

それはほとんど悲鳴であった。

ナハトへの距離は、アウレールよりもクラウスのほうがよっぽど近い。

助けようにも間に合わない……!」

けれど、それでも、助けようと彼に駆け寄る。

クラウスが下げていた矢の一本を掴み取り、振り上げたその時だった。

「ちよいと待たんか」

朗々とした声が響き渡った。

それと同時にクラウスの振り上げた腕もピタリと硬直する。